

もくぞうさんじゅうさんおうげんしんぞう  
木造三十三応現身像

<概要>

員数	32軀 (33 軀のうち1 軀は補作)
法量	像高 64.8~78.2 cm
時代	室町時代後期 (16 世紀)

本像は、円福寺観音堂に安置されている。観音堂では中央の厨子<sup>1</sup>内に十一面観音立像、左に不動明王、右に毘沙門天の立像が祀られている。この三尊像を挟む形で、三十三応現身像が配置されている。『法華経』では、観音菩薩はあまねく衆生を救うために相手に応じて三十三の姿に変化するといひ、三十三応現身像は、それを図像化したものである。すなわち、仏身、辟支仏身、声聞身、梵王身、帝釈身、自在天身、大自在天身、天大將軍身、毘沙門身、小王身、長者身、居士身、宰官身、婆羅門身、比丘身、比丘尼身、優婆塞身、優婆夷身、長者婦女身、居士婦女身、宰官婦女身、婆羅門婦女身、童男身、童女身、天神身、龍身、夜叉身、乾闥婆身、阿修羅身、迦楼羅身、緊那羅身、摩睺羅伽身、執金剛身の三十三身である。

本例においては、いずれも正面を向いて岩座<sup>2</sup>に直立する点では共通するが、印相<sup>3</sup>を結ぶ像、持物を執る像など三十三様の姿にあらわされている。なお、本例において天身像は補作である。全国的にみても三十三応現身像の作例は数が少なく、中世以前では数えるほどである。当初の彩色が残らないのは残念ではあるが、応現身像がまとまった形で残ったのは貴重である。

厨子<sup>1</sup> 仏像等を安置するもの。箱形や小建築形（宮殿）のものがある。

岩座<sup>2</sup> 岩をかたどった、仏像を安置する台。

印相<sup>3</sup> 仏の働きを象徴する手指のしぐさ。



三十三応現身像（厨子左側）



三十三応現身像（厨子右側）